

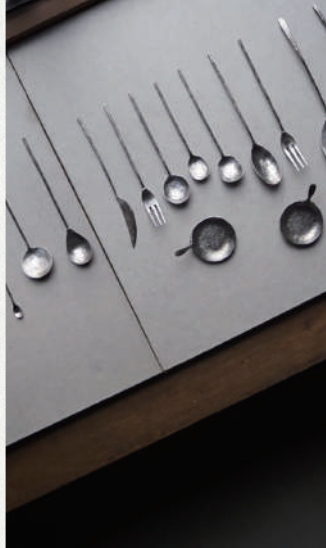
ブランド価値を上げ、 黒江の価値を上げる

武田さんは「わざわざ黒江に足を運んでも行きたくするような、価値ある場所をつくりたい」という夢を描いています。そのためには日本各地で展覧会や、海外での展示を実施して、HOUSEHOLD INDUSTRY の認知度とブランド価値を上げていきたいと目標を語ります。手しごとで紡がれてきた黒江の歴史を自分の手で次世代へ繋いでいくために手しごとを軸とした新たな展開も考えています。そのために仲間と連携を取りながら新しい風を入れていくことが必要だそうです。今の黒江には移住してきたり、スタジオを構えたりする人がいる中でよりスムーズに若い世代が入ってきやすい環境を整えていくことが今の自分の役割だと覚悟を語ってくれました。



HOUSEHOLD INDUSTRY / 鍛鉄工芸家 武田伸之さん

1977 年和歌山県海南市生まれ。大阪芸術大学金属工芸学科卒業。
株式会社藤田工業にて勤務のち、鍛鉄工芸作家である西田光男氏に師事。2013 年和歌山県海南市に戻り、HOUSEHOLD INDUSTRY として活動開始。(Photo by Itsuko Shimizu)



19

2025.7.1 発行
TAKE FREE

編集メンバーおすすめの一冊



日本美のこころ

出版社：小学館 / 著者：彬子女王

彬子女王殿下が 5 年間の英国留学を経て、外から日本を客観的に見つめなおす中で気づいた「日本美のこころ」について探る旅を綴った一冊です。写真とともにその様子が描写されており、読み進めるうちに「見てみたい」「行ってみたい」という気持ちが芽生えてきます。日本独自に育まれてきた美意識の根拠を辿っていくと日本人であることの誇りや感動を再確認することができます。

編集後記

Vol.19 となる今回の「和 the」では、初めて和歌山市を離れ、海南市黒江の武田さんにインタビューを行いました。お話を伺う中で、武田さんの鍛鉄へのこだわりと、その背景にある黒江に対する熱い想いに圧倒されていました。武田さんは、自らプレイヤーとして、鍛鉄という技法を通じて黒江の町を表現しながら、町のさらなる発展を願い、次世代のために行動されていて、その志に深く感銘を受けました。和歌山市民図書館の移転グランドオープンから 5 周年を記念し、6 月から 2 階イベントスペースで開催した武田さんの展示「黒江の暮らしと鍛冶屋の手しごと」では、武田さんの想いととも、まだあまり知られていない和歌山の技術を皆様にご覧いただく貴重な機会になったかと思います。展示をご覧いただいた方々の中で動かされた感情が、この「和 the」Vol.19 を通じてさらに深い感動に変わることを願っています。今後も「和 the」は情報発信のプラットフォームとして、まだ知られていない和歌山の魅力をお届けしていきます。どうぞ引き続きご期待ください。



「和 the」は和歌山市民図書館が発行する、まちの技・巧・匠を発信するフリーペーパーです。図書館がまちと接点をもち、まちが誇る文化や技術を発信しています。まだ知らない、ここ和歌山の魅力にぜひ触れてみてください。

和歌山市民図書館

WAKAYAMA CIVIC LIBRARY

〒640-8202 和歌山県和歌山市屏風丁 17 番地
開館時間 / 9:00~21:00 TEL / 073-432-0010

和 the バックナンバーは、図書館 HP より
ご覧いただけます



ホームページ



Instagram



facebook



黒江の暮らしと 鍛冶屋の手しごと

Kuroe in Blacksmith.

取材協力: HOUSEHOLD INDUSTRY 武田伸之さん、武田牧子さん

和歌山市民図書館
WAKAYAMA CIVIC LIBRARY

鍛鉄 たんてつ とは

鍛鉄とはヨーロッパで生まれた、無垢の鉄を加熱してハンマーで叩いて形作る手法で、もともとは家主が自分の権力などを誇示するため、強さや華やかさをもとめ、鍛冶職人に作らせていました。

一つひとつ手で作るため、同じものは存在せず、火と手で鍛えられた鉄は独特の風合いと美しさがあり、建築、工芸、彫刻など幅広い分野で用いられています。

武田さんは鍛鉄の技術を用いてインテリア、エクステリア、サイン、オブジェなどを一点一点オーダーメイドで制作しています。また、展示用の作品としてカトラリー、燭台、花器などの作品を日本や台湾のギャラリーにて展示販売を行っています。

手はすべての五感とつながっている

制作過程の最初において、まず手で素材に触れます。そして、スケッチし感じたことを言葉で描写します。その場の光や影、香り、温度、音、風、あらゆる感じたものを、手に宿しその瞬間を作品にします。

武田さんはその手の感覚を大切にしている「手はすべての五感とつながっている」と語ります。

また、黒江の暮らしの中で身近な庭や道端の植物をモチーフにするようになったことで、西洋鍛鉄が持つ力強さ、華やかさとは対照的な東洋における鍛鉄表現を追求するようになりました。

そして、日本固有の美意識である「侘しさ」や「儚さ」を表現するようになりました。

鉄は熱いうちに打てという言葉があるように感情や感覚の臨場感を手に宿す事で、より良い作品が生まれるそうです。

黒江のまちを作品に昇華する

和歌山が誇る（技・巧・匠）を発信する和歌山市民図書館フリーペーパー・和 the. Vol.19 は「黒江の暮らしと鍛鉄工芸家の手しごと」をテーマに海南市黒江で鍛鉄工芸家として活躍される武田伸之さんと牧子さんを取材しました。

大学で金属工芸を学んだ武田さんは、産業機器を製造する会社に勤めたのち、埼玉県に工房を構える鍛鉄工芸家 西田光男さんのもとで4年間の修行を重ねました。そして生まれ育った町である海南市黒江に戻り、HOUSEHOLD INDUSTRYとして活動しています。黒江の町で活動続ける武田さんのこだわりと「ワザ」に迫ります。



生活と仕事が隣り合うまち

黒江と言えば日本三大漆器と称される「紀州漆器」の産地として知られています。作業場や蔵が道路に面して一定の角度で建つ様子は「のこぎり歯の町並み」として現在も昔の面影を残しています。三方を山に囲まれ山側には職人、川側には問屋がひしめき合っていました。武田さんの幼少期は職住近接の生活が当たり前で町全体が巨大な工場のような感じでした。そんな生活と仕事が隣り合う町で武田さんの手しごとへの憧れは大きくなっていきます。(Photo by.Itsuko Shimizu)



人の手によって紡がれてきたまち

黒江の産業を支えてきた紀州漆器は経済産業省が認める「伝統的工芸品」に認定されています。その認定条件のひとつに「製造過程の主要部分が手工業的」というものがあります。武田さんは幼い時から自然に工芸や手しごとに触れる機会が多くありました。当時の黒江は狭い路地に人に溢れ、泥臭く活気にあふれていたそうです。幼い時から見てきたその風景がこれからひとつでも多く残ってほしいと武田さんは作品制作に打ち込みます。



ふとした日常が作品になるまち

武田さんの制作の源となっているのは早朝まだ誰もいない時間の散歩だそうです。静かな町を散歩していると思いが巡り、頭の中が整ってくると言います。まだ薄暗い早朝の青い光、庭の変化や鳥の囀り、鈴虫の音に耳を傾け、当たり前のようにあるその日常を切り取り、表現するからこそ、だれもが親しみやすい、なじみのある感情を抱くことができる作品になるのかもしれない。